

神代の月

土田龍太郎

はや十年あまりの昔のことにもやありけむ、定かにはおぼえねども、一日瑞垣といへる伊勢神宮廣報紙をなに心なく見ぬたりしに、神宮奉納の短歌俳句募集の記事おのづから目とまりたり。これ大神宮に観月會といへる催しありて、年ごとに弘く崇敬者より和歌俳諧を募れるに、人々のおこせる歌と句と集まれることいとあまたなれば、選者の目にかなへるものおほよそ二十首二十句ばかり選りすぐりつつ、特選入選佳作準佳作の四の級に分ち、また選者自作を加へて、八月十五日秋の中望の夜に獻詠披講するを習ひとせるにてぞありける。

かけまくもかしこき大御神の鎮まりませる五十鈴川上のありさまのゆかしきことよなし、神路の奥の峰に吼ゆる松風の聲また聞かまほしけれど、旅路のわづらひのいとはしきにたへかねて、いまだ内外兩宮に詣づることだにせぬままに老いの齡のみいたづらに加れるはただわれからのおこたりゆゑなれば今さらに悔ゆともかひなかるべし。されば神代より流れ絶えせぬ御裳濯川に寫れる秋のさ中の夜はの月いかばかりさやけかるらむとただはるかに思ひやるほかにすべなし。おほかたのけしきの心に浮べるままにかつ口遊まれぬるは、

秋風に五十鈴川もの霧はれて

神代もかくや清き月かげ

この一首詠みいづるにまかせて観月會に送りしかども、選者らの顧ることさらになくてすぎにけむこそいとあいなかりしか。かかるべしとはかねて思ひまうけざりしにもあらねばさまでは恨めしからねども、さはれ準佳作の列にだに入らでやみぬること、さすが侮られぬる心地なきにしもあらぬぞいとうたてき。

長祿三年のことかや、大神宮にて千句興行のありしをり、かの種玉庵宗祇のものしたりし

神代にもかくやすめるを秋の月

といへる句、先つころかの法師の發句帖の中にふと見出でてうちおどろかれぬるは、右のわが一首と言の葉ばかりは似よれるところのあればなるべし。

この句いと言そぎたれど、わづか十七字の内にくすしき力こまれるにや、神代にありしながらの秋の月ただ今日の上に仰ぎ見る心地さへせらるれば、げに種玉庵おぼろけの作者ならず、世に名匠と讃へられるはうべことわりなりとおぼゆるぞかし。

いふかひもなきわが腰折れ、これに比ぶべくもあらぬはさることにて、ことには下の句の神代もかくやといへるところなにとやらむさとびて聞ゆれば、一首のおもむきただなほざりにして長高(たけたか)からず。されば、なまじひに字句ばかりを改むるもよしなかるべしとおぼゆるものから、むげにうち棄ててやみなむもはたあぢきなし。しばらく下の句ばかりを詠み變へてみばやと心づきぬるは、よろづにいさぎよからざるわが心ならひゆゑにてもやあるらむ。

ここにまた思ひ出づるに、その上修理大夫俊綱の家に人々集ひて、水上の月といふことを歌に詠みけるとき、田舎より上れる兵

水や空空や水とも見えわかぬ

かよひてすめる秋の夜の月

といふ一首を人づてに披露せしめたりけり。あやしの賤の男の歌のかくばかりめでたからむとはつゆ思ひぬたらざりし大宮人、おどろけることただならず、かつ譽めののしりかつ恥あへりと十訓抄と古今著聞集には記されたり。その夜これにまされる歌つひになかりしとぞ。

げにこの一首おぼろけの歌人のいかに巧みをこらすともえ及ぶきはにあらざることまぎれなし。まして拙きわが身まねばむともまねぶべからざるは言ふもさらなり。さればわが改めものせる

秋風に御裳濯川の霧はれて空と水とにすめる月かげ

てふ一首、かの青侍の歌にはたぐふべくもあらず、ただうはべばかりを似せたるのみ。

(令和元年七月八日受附)